

2016年5月26日／浪宏友ビジネス縁起観塾

学びのアルゴリズム

1. 概要

(1) 資料

増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫(p.283)／実践の方法(道)に関する経典群／諦相応／5 如来所説(この経文は4つに分けて考えることができます。今回は、第三の部分を学びたいと思います)

(2) 主題

四つの聖諦(四諦)を体得する道について学びつつ、現代科学と仏教の類似性について研究したいと思います。

2. 三転十二行

(1) 三転

この経文に「比丘たちよ、わたしは、この四つの聖諦について、このような三転十二行をいとなみ、如実知見のことがすっかり明瞭となった」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.286)という一節があります。

三転とは「示転(じてん)・勸転(かんでん)・証転(しょうてん)」の三つの段階のことで、教えを学ぶ手順(アルゴリズム)として説かれています。

① 第一段階は「示転」で、理論を正しく知ることです。

師匠から示された教え(理論)を正しく理解するという段階です。

② 第二段階は「勸転」で、理論通りに実践することです。

師匠が弟子に、教え(理論)の通りに実践することを勧める段階です。

③ 第三段階は「証転」で、理論と実際とが整合することを確認し確証を得ることです。

理論を実践した弟子が、教え(理論)と実際が整合していることを得心する段階です。

(2) 十二行

四つの聖諦の一つ一つを三転するので、 $4 \times 3 = 12$ で、十二行になるのです。

3. 無師独悟

ここに「(釈迦牟尼世尊は)三転十二行をいとなみ、如実知見のことがすっかり明瞭となった」とあります。

釈迦牟尼世尊は、誰の助けもなく、四つの聖諦を示転・勸転・証転して、真実を悟ったのです。これを無師独悟(師を持たずに独りで悟る)と言います。

4. 事象と法則

あらゆるものごとは、法則に従って動いています。

個々の事象に限られた狭い範囲の法則もあります。多くの事象に共通する普遍性のある法則もあります。私たちは、ものごとの法則を知り、活用することによって、望ましい結果を得ることができます。

示転・勸転・証転は、ものごとの法則を知るための普遍的な方法です。現代科学でも、表現は違いますが、内容的には同じことを行なっています。

5. 現代科学の方法

(1) 法則の確立

① 法則の発見から発表まで

- ・あるものごとを観察し、法則性を発見する
- ・そのものごとにおける法則の仮説を立てる
- ・仮説に基づいて実験または観察を重ねる
- ・仮説とそのものごとが整合しているかどうかを吟味する
- ・仮説とそのものごとが整合しているという確信を得たら、法則として発表する

② 他人による検証

- ・他の人が法則を検証する
- ・検証を経て、仮説とそのものごとが整合していることが確かめられると、法則として確立する

(2) 現代科学の方法と示転・勸転・証転の対照

現代科学の方法		示転・勸転・証転
法則発見者	法則性を発見し、仮説を立てる	示転
	仮説に基づいて実験・観察を行い、仮説と事実との整合性を吟味する	勸転
	仮説と事実との整合性を確信したら、法則として発表する	証転
他の研究者	他の人による法則の理解	示転
	他の人による法則の検証	勸転
	他の人による法則と事実の整合性の証明	証転

(4) 要点

「示転・勸転・証転」にしても、「現代科学の方法」にしても、要点は、「理論と実際が整合する」ということです。

6. 釈迦牟尼世尊の自覚

この経文では、次の定型文が繰り返されます。

「さきにはいまだ聞かなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じた」(増谷文雄編訳『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 284等)

これは、釈迦牟尼世尊が、四つの聖諦を発見し、検証し、実証し、これによって苦悩を解決できると確信したという自覚を述べた言葉として受け取ってよいと思います。

(1) さきにはいまだ聞かなかった

「さきにはいまだ聞かなかった」とは、「これまで誰からも聞いたことがない」という意味だと思います。釈迦牟尼世尊は、当時行われていた教えを徹底的に学んだと言われています。そのいずれにも、四つの聖諦は説かれていなかったのでありましょう。

(2) 悟りを得る

「眼が開け」とは、四つの聖諦に気づいたことを言っているのだと思います。

「智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ」とは、思索と実践を重ねて、四つの聖諦と現実の整合性を確かめ、真理として確立していったことを述べているのでありましょう。

(3) 光明が生じる

「光明が生じた」とは、四つの聖諦によって、苦悩を解決する道筋が見ついたことを言っているのでありましょう。この言葉には、大きな喜びが感じられます。

(4) 普遍の真理

庭野日敬師は、次のように言っています。

「釈尊は、『この世界はどんなものか。人間とはどんなものか。だから人間はこの世にどう生きべきであるか。人間同士の社会はどうあらねばならないか』ということなどについて、長い間考えて考えぬき、そして『いつでも』『どこでも』『だれにも』当てはまる『普遍の真理』に達せられたのです」(庭野日敬著『法華経の新しい解釈』佼成出版社、p. 12)

「四つの聖諦」が、「いつでも」「どこでも」「だれでも」当てはまる「普遍の真理」であることは、長い歴史のなかで、多くの仏教者の手によって、繰り返し確認されています。

7. 経文＝三転十二行

(1) 「苦の聖諦」の三転(増谷文雄著『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p.284～285)

① 示転＝「苦の聖諦」を理解する

かくて、比丘たちよ、苦の聖諦とはこれであると、さきにはいまだ聞かなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

② 勸転＝「苦の聖諦」を実践する

比丘たちよ、また、まさにこの苦の聖諦を知るべきであると、さきにはいまだ聞かなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

③ 証転＝「苦の聖諦」を悟る

また、比丘たちよ、すでにこの苦の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだ聞かなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

(2) 「苦の生起の聖諦」の三転(同、p.285)

① 示転＝「苦の生起の聖諦」を理解する

かくて、比丘たちよ、苦の生起の聖諦はこれであると、さきには聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

② 勸転＝「苦の生起の聖諦」を実践する

また、比丘たちよ、まさにこの苦の生起の聖諦を知るべきであると、さきには聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

③ 証転＝「苦の生起の聖諦」を悟る

また、比丘たちよ、すでにこの苦の生起の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだかつて聞かれなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

(3) 「苦の滅尽の聖諦」の三転(同、p.285～286)

① 示転＝「苦の滅尽の聖諦」を理解する

かくて、比丘たちよ、苦の滅尽の聖諦はこれであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

② 勸転＝「苦の滅尽の聖諦」を实践する

また、比丘たちよ、まさにこの苦の滅尽の聖諦を知るべきであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

③ 証転＝「苦の滅尽の聖諦」を悟る

また、比丘たちよ、すでにこの苦の滅尽の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだかつて聞かれなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

(4) 「苦の滅尽にいたる道の聖諦」の三転(同、p. 286)

① 示転＝「苦の滅尽に到る道の聖諦」を理解する

かくて、比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦はこれであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

② 勸転＝「苦の滅尽にいたる道の聖諦」を实践する

また、比丘たちよ、まさにこの苦の滅尽にいたる道の聖諦を知るべきであると、さきにはいまだかつて聞いたこともないことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

③ 証転＝「苦の滅尽にいたる道の聖諦」を悟る

また、比丘たちよ、すでにこの苦の滅尽にいたる道の聖諦は、わたしによって証せられたのであると、さきにはいまだかつて聞かれなかったことについて、わたしには、眼が開け、智が生じ、理解が生じ、叡智が生じ、また光明が生じたのである。

8. 解脱への道

(1) 経文

①「比丘たちよ、わたしは、この四つの聖諦について、このような三転十二行をいとなみ、如実知見のことがすっかり明瞭となるまでは、比丘たちよ、わたしは、けっして、天神・悪魔・梵天をふくむかの世界、沙門・婆羅門・人天をふくむこの世界において、最高の正等覚を覚りえたと称しなかった」(増谷文雄著『阿含経典2』ちくま学芸文庫、p. 286)

②「しかるに、比丘たちよ、わたしは、この四つの聖諦について、このような三転十二行をいとなみ、如実知見のことがすっかり明瞭となったからして、比丘たちよ、わたしは、はじめて、天神・悪魔・梵天をふくむかの世界、沙門・婆羅門・人天をふくむこの世界において、最高の正等覚を覚りえたりと称したのである」(同、p. 286～287)

③「また、わたしには、智慧と明察とが生じた。すなわち、〈わが心の解脱は不動である。これがわたしの最後の生であって、もはや、ふたたび迷いの生涯を繰返すことはないであろう〉と」(同、p. 287)

④「世尊はそのように説きたもうた。五人の比丘たちは、歡喜して、世尊の説きたまえるところを受領した」(同、p. 287)

(2) 経文の概要

① 釈迦牟尼世尊は、四つの聖諦が明らかにならない間は、自分は正等覚を覚り得たとは、誰にも表明しませんでした。

② 四つの聖諦について三転十二行を営み、真実がすっかり明らかになったと確信したときに、自分は正等覚を覚り得たと世間に広く表明しました。

③ 釈迦牟尼世尊は、自分は再び迷うことはないかと確信しました。

④ 五人の比丘が、喜びを覚えながら教えを受け止めました。

(3) 最後の生

ここに「これがわたしの最後の生であって、もはや、ふたたび迷いの生涯を繰返すことはないであろう」とあります。

「最後の生」の「生」は「迷いの生涯」です。四つの聖諦を悟り、真の人間の生き方に目覚め、八正道を歩むようになり、迷いの生涯は終わりを告げたわけです。

これからは、真の人間の生き方で、生涯を送ることになります。

(4) 確信

この経文について、水野弘元博士は、次のように解説しています。

「釈尊は、この三段階の十二行相が完成されたときに、はじめて自分は、一切世間において、この上ないすぐれたさとりを得て仏陀となったことを、確信をもって公言できるようになり、確固不動の解脱を得て、もはや、生死輪廻を越えたのであると説かれた」(水野弘元著『原始仏教入門』

佼成出版社、p. 54)

9. 学びのアルゴリズム

示転・勸転・証転を、学びのアルゴリズムとして取り入れることをお勧めしたいと思います。

- ・まず、理論を学び、正しく理解します。
- ・次に、理論の通りに実践します。
- ・そして、理論と現実が整合することを確認します。

この三つが揃えば、自分は正しく学び得たと言えると思います。